UIFAニュース

発行　宇治市国際親善協会
事務局　〒611－8501　宇治市宇治琵琶33 宇治市役所秘書広報課内
電　話　0774－22－3141（内線2058）　FAX　20－8776
ホームページ http://uifa.news.coocan.jp

第　75　号
平成28年（2016年）3月

咸陽市へ公式訪問

山本正宇治市長を団長とする、平成27年度宇治市咸陽市公式訪問団13人（市民訪問団８人、行政訪問団５人）は、11月16日～19日まで中国咸陽市を訪問し、友好都市盟約締結29年を迎える同市との友好を深めてきました。

咸陽市滞在期間中は、国際ソロプチミスト宇治の皆さんが中心となって図書館を建設され、また、文通を通じて宇治市立の小学生と交流のある永平小学校や、多くの宇治市民の皆さんのご支援・ご協力のもとに進めてこられた黄土高原植林緑化事業地「宇治友好の森」などを視察しました。

衛華咸陽市長を表敬訪問（行政訪問団）

大雁塔にて集合写真

訪問団は、恵進才副市長をはじめ咸陽市職員出席の晩餐会に出席をし、19日朝には別行動となる市民訪問団を見送った後、行政訪問団は衛華咸陽市長を表敬訪問、来年が両市の友好都市盟約30周年記念にあたる事を確認し、両市の友好の歴史を振り返りました。

当協会から派遣した市民訪問団員は、咸陽市を離れてから、成都、上海を視察し23日に帰国しました。

今回咸陽市公式訪問団に市民訪問団員として参加されました、お２人から訪問記を寄せていただきましたのでご紹介いたします。

咸陽市公式訪問団旅行記

市民訪問団員　中　山　幸　子

2015年11月16日、空は一点の曇りも無く出発を祝うかのように晴れ渡っている。「咸陽市公式訪問団」の名に少々の緊張も覚え、常の旅とは異なる感慨が湧き上がってくる。関空から上海経由で西安咸陽空港に到着。咸陽市外事弁公室の人達の出迎えを受け、空港のレストランで無事到着を、ビールで乾杯!!

翌日は生憎（あいにく）の空模様、永寿県植林地「宇治友好の森」を視察。途中でとうとう雨となる。バスより降り立つと色鮮やかなチェック柄の傘が用意されていて、その心づかいが塗り込めたような暗い景色に、一条の光となった。両市による植樹も行われ、ぬかるんだ黄土高原の土が靴底を覆う。

永平小学校へと移動し６年生の授業を参観。教室の床は冷たいコンクリート。暖房等はもちろん無く、先生はコートを着用。生徒もジャンパーのような防寒着を着ている。この様な環境の下でも子ども達は前を向き、背筋をピンと伸ばし真剣な表情で先生を見つめる。訪問団からの「将来の夢は？」の問いに、「ハイ、ハイ」と手が挙がる。もう自分の夢はくっきりと描かれている様子に、心の中で拍手を送り幸せを祈る。

その夜の晩餐会は盛大なものであった。副市長を始め、咸陽市外事弁公室の人々等。白酒（bái jiǔ）、干杯（gān bēi）は果てるともなく続く。山本市長からは2016年、友好都市盟約締結30周年に「是非、宇治でお会いしましょう」との挨拶があった。

３日目、雨は上がったが青空は見えず景色は灰色の中、バスは進む。西安兵馬俑博物館はさながら巨大なテーマパークのように人で溢れ返っている。毎日１万人近くの入場者があるとか。25年ほど前に訪れた時とはガラリと変わっていて歳を重ねた身には、昔日の素朴さが何故か懐かしい。西安のシンボル、玄奘三蔵ゆかりの大雁塔の周りも又同様の変わりようで、７層の塔に登るには30元が必要となっていた。シルクロードの起終点西安は13の王朝が都を置いた3000年の古都。だが、〝しっとりとした古都〟の風情は、もはや捜しようもない。ふと空を見上げると、暮れなずむ西の空に高く高く連凧が舞っている。

４日目、咸陽市とは今日でお別れ。いろいろお世話になったこの町をみておこうと、朝食をスルーして

ホテルを出る。ホテル前の大通を西へと歩き出す。町はもう人と車で喧噪状態、交差点を渡るには技術がいる。信号は有って無きが如し。この地の人達に紛れて小走りに渡るのだが、その前をバイクがサッと横切る。人と車のギリギリの攻防である。町では朝食があちこちで売られ、食堂には湯気が立ち昇っている。立ち喰いスタンドにも長蛇の列。スーパーも人で一杯。当地では朝食は家で食べないのだとか――。大きな病院の前に来た。たくさんの人々が吸い込まれるように入って行く。みんなみんな忙しそう。

さて、見送りの人々に別れを告げ、いざ出発!!　西安空港から成都へ。成都は四川省の省都であり、人口1,200万の大都会である。三国時代に活躍した劉備と諸葛亮ゆかりの土地で（二人を祀る武候博物館を見学）、パンダの故郷、激辛な四川料理（陳さんの麻婆豆腐を食す）が日本人にも馴染み深い。夜、現地の添乗員に「これを観なければ損ですよ」と熱心に勧められ、〝変面ショー〟を大枚6,000円を払って観た。

旅の終わりは上海。言わずと知れた中国最大の国際都市である。空港からホテルまで渋滞に次ぐ渋滞で予定の倍近くを要した。車はドイツ車が多い。大方は合弁会社で生産された現地の物らしいが、輸入車には100％の関税が掛かっているとか。そんな高価な車も目に付く。外灘（わいたん）（バンド）の遊歩道からガイドが対岸の高層マンションを指さして、「あちらは億ションです。我々とは別世界の人々が住んでいます」と言う。しかし、豫園商城附近には昔のままの崩れ落ちそうな家もある。落差の大きい街であった。

今回のたった８日間の短い旅。中国を語るのはとても難しいが、巨大なエネルギーが充満しているように感じたのは私だけだろうか。

宇治市咸陽市公式訪問団に参加して

市民訪問団員　小　島　義　治

11月16日朝、市役所ロビーで盛大な見送りを受けて出発した。市政だよりの募集記事に咸陽、西安、成都、上海歴訪とあるのを見て興味をそそられたのが動機である。まさに中国古代史と近代史の坩堝とでも言える地域ではないか。

関西国際空港を飛び立って間もなく眼下に瀬戸内海が見えた。黄海を一飛びして間もなく上海浦東空港に着き、乗継して午後８時西安咸陽国際空港に到着、咸陽市外事弁公室の方々のお出迎えを受けて咸陽国貿大酒店に落ち着いた。

咸陽市の要人を交えた歓迎の晩餐会は和やかで楽しい雰囲気に包まれ、料理良し、酒良しの素晴らしいものだった。市長のご指名を受けて、とっさに李白斗酒詩百篇の漢詩を引用してスピーチをしたが、うまく気持ちが伝えられたかどうか、言葉の壁は如何ともしがたい。恒例の宇治友好の森や永平小学校を訪問して、民間交流の大切さを実感した。外事弁公室の王煥さんのご案内で訪れた乾陵、兵馬俑坑の迫力には圧倒された。

11月19日午後、咸陽市西安市に心を残して、空路成都市に移動した。天府の国と言われた巴蜀の地は三国志の聖地であり、諸葛亮を祀った武候祠には、関羽、張飛、趙雲、馬超、黄忠らの蜀漢の武将たちの塑像が並び主君たる劉備の霊廟がある。ほかにも杜甫草堂や寛窄巷子、錦里など見どころに事欠かない。又、四川の伝統劇である川劇（せんげき）がある。錦江劇場でそれを鑑賞したが三国志の一場面、ラブロマンス、最後に変面ショーがあった。踊りながら瞬間に変面する。何とも不思議で中国第一級の国家秘密とされている。もう一つの見所は、成都市から30キロ離れた広漢市にある三星堆博物館で、三星堆遺跡は1931年に発見され1986年には大量の青銅器、金器、玉器が発掘された。目が飛び出したような仮面が特徴の、黄河文明とは別の長江上流域で発達した長江文明と言える。

11月21日、古代史の世界から一足飛びに近代史の始まる上海に飛ぶ。上海は来るたびに変貌している。外灘（わいたん）、フランス租界跡の新天地、上海博物院を歩く。上海博物院は中国の主権の及ばない共同租界の上海競馬場のあったところだ。上海が歴史の舞台に出てきたのは170年前で、阿片戦争で英国に敗れた結果、列強の植民地支配が進んだ。共同租界とガーデンブリッジを挟んで日本租界があった。1932年に日本軍は上海事変を起こして、侵略戦争の火蓋を切り、日中戦争に拡大し、中国に甚大な惨禍をもたらした。推進した軍国主義勢力の中心は陸軍士官学校、陸軍大学校を出たエリートと言うにはあまりにも愚かしい軍部官僚達で、やがて、アジア太平洋戦争に拡大し、我が国も主要な都市は悉く灰燼に帰し、銃後を含めて三百数十万の犠牲者を出した。世代は移っても日本国民は永久にこの歴史を忘れてはならないと思う。中国古代の戦国策に鷸蚌（いつぼう）の争いという言葉がある。シギとハマグリの争いに漁夫が利を得るという意味だ。国民党軍の力を削ぐ為に日本軍を利用し、力を温存して共産党軍の勝利につなげたと毛沢東が言ったとか。いずれにしても、戦前戦中の権力層の愚かしさには、言葉を失うばかりだ。このような愚を二度と繰り返さないよう、日本国民はもっと賢明にならなければと思いつつ、帰途に着いた。

宇治市日本中国友好協会、中国への歴史の旅

〝隠元禅師〟と〝文豪魯迅〟を偲ぶ

宇治市日本中国友好協会
中国歴史の旅　副団長　池　内　光　宏

宇治市日本中国友好協会は、昨年12月９日から12日にかけて井上浩会長を団長に、宇治黄檗山萬福寺の中島教学部長をはじめ15名の訪問団員が、中国福清市にある隠元禅師ゆかりの黄檗山萬福寺、さらに上海市にある上海魯迅記念館など３泊４日の行程で、歴史の旅に出かけました。

中国到着２日目、私たちは、福清市　黄檗山萬福寺を訪ねました。荒々しい岩肌を背にした萬福寺では、釈悲昇住職が、訪問団を暖かく出迎えて下さり、〝中日友好と平和への気持ちは変わらない。ぜひ宇治市と福清市との友好交流が実現するよう宇治市長に伝えて欲しい。〟と350年以上の時空を超えて、日本と中国の歴史の重み・友好交流の大切さを訴えられました。あわせて寺の見学を通じ、日本の歴史・文化が、如何に中国から影響を受けているのかも十分学ぶことができました。

中国訪問３日目は、中国でも有数の海上巨大都市、人口2,000万の上海市にある日中文化人との交流、とりわけ魯迅と親交が深かった内山完造書店跡や上海魯迅記念館を訪問しました。記念館では、ク・ヒン副館長から「魯迅先生が、内山書店の文豪らと山政小山園の宇治茶（※玉露かりがね）で交流された」との逸話もお伺いし、お茶を通じて日中友好交流があったことを、改めて知らされました。

最後の４日目は上海市でも有名な「豫園」（全国重点文物保護単位）を訪問し、18年もの歳月を費やして造営された約２万平米におよぶ明代の庭園を観光しました。これもまた、平安時代の日本の歴史遺産・平等院を有する歴史のまち宇治市と重なり、訪問団一同、感激し帰路についた次第です。

いずれにせよ今回の旅は、私たちに日本と中国、何より宇治市と福清市や上海市の切っても切れない歴史の絆と繋がりから何を学ぶのか、また宇治市民、とりわけ若い世代の人たちに、歴史の真実と日中友好交流の大切さを、どれ程伝えていけるかが問われた旅になったのではないでしょうか…。

「災害時多言語情報センター設置・運営訓練」に参加して

宇治市国際親善協会　副会長　矢　野　友次郎

12月７日に京丹後市で「災害時多言語情報センター設置・運営訓練」があり、宇治市より国際交流クラブの方を中心に７名で参加しました。この訓練は、（公財）京都府国際センター主催で、府各地より参加され、各市町の実態についての交流も行なわれました。訓練内容は、市町の災害時における外国人登録者や旅行者の被災実情の把握と多言語情報センターの設置判断やセンター設置の班編成（総務班、情報班、避難所巡回班）・各班での作業実施等で、特に自治体と地域国際協会の支援のあり方や民間の協力・連携の必要性について論議されましたが、多言語情報の提供の仕方、国の情報の扱い、地域とのつながりのない人達の不安解消をどうすれば良いか、一方で支援体制が具体的に構築できるかが大きな課題として認識されました。

訓練は、避難所の外国人の方に余震の不安や、水・食料やトイレ、寝る場所の説明を情報としての伝え方、ライフラインや交通情報、生活情報の伝達の仕方を学び、避難所へ多言語の出来る担当者の派遣の実習を行いました。

仮に、この訓練を宇治市に置き換えると市には、約2,600人の外国人登録者（韓国・朝鮮＝1,500人　中国＝700人　米国＝30人　ブラジル＝15人　その他＝約355人）がおられ、そして多くの旅行者が宇治に来られています。災害時は、どの避難所に避難され、被災予測の状況はどの様なものか、支援者の体制は、リーダーや人材の有無はと思う時、この訓練を受講した者として支援活動の今後に向けての課題の大きさを覚えるものです。

支援者の育成や、行政と社会福祉協議会と民間の連携、大使館との情報の共有・安否確認を主とした連携、そして訓練の在り方が考えられますが、まずは市として防災計画でどの様に謳われるか、又、親善協会としてどの様な協力が可能か、そんな思いが頭の中を駆け巡りながらバスに揺られ、帰途につきました。

5月14日
開催

国際交流講演会

「みんなの知らないオーストラリア」

元々シドニーで高校教師であった私は、外国青年招致事業（JETプログラム）により、2009年７月に宇治市にやって来ました。当初は１年だけの予定でしたが、宇治市が大好きになり、またその宇治市で英語を教えるという仕事が楽しくなり、さらに２年延長することに決めました。その後、新たな挑戦をしたくなった私は、神奈川県に移り、慶應義塾湘南藤沢中等部・高等部で働くことにしました。

その間、結婚をし、昨年５月には娘が生まれ、妻の実家がある宇治市に戻ることに決めました。そして、今は木津川市にある同志社国際学院にて国際バカロレアを教えています。

時間が出来ると、紅葉谷や天ケ瀬ダム周辺を散策したり大吉山に登ったりするのが好きです。木津川のサイクリングロードをサイクリングしたり、日本国内を旅行するのも好きです。実際のところ、オーストラリアよりも日本の方を良く見て回っています！

日本の方々はすでにオーストラリアの事を良くご存知ですが、この講座では皆さんが聞いたことが無いような事をお話しします。ほとんどの人が知らないような私の故郷の話に少しでも興味を持っていただけたら、と思っています！

国際交流講演会　**「みんなの知らないオーストラリア」**

講　師　ベネディクト・ピアーズ・バックノールさん
（元宇治市AET、オーストラリア出身）

日　時　平成28年５月14日㊏　14：00～15：20

場　所　宇治市生涯学習センター第２ホール

定　員　先着70人　　参加費　無料

※宇治市国際親善協会員以外の方もご参加いただけます。
　お誘いあわせのうえご参加ください。
※講演会終了後、宇治市国際親善協会総会を行います。

雑観雑感

大切な人を大事にする

時間が戻ればなんて毎日考える。
３月10日の夜、お前の炊き込みご飯が
世界一うまいって言えばよかった。
ボチボチだなんて言うんじゃなかった。
まだまだ先の事は考えられない。
いつでも「死」はそこにある。
いつでも「別れ」はそこにある。
（中略）
それはいつ起きるかわからない。
今日かもしれないし、明日かもしれない。
大切な人を大事にできるチャンスは、
今日が最後かもしれない。
最後だと思えばやさしく出来る。
最後かもしれないと思ったら、
温かい言葉をかけて微笑んでいられる。

これは３.11の震災後に書かれたものです。

この書き込みを最近読んで、今年の初めに96歳で亡くなった母の事を思った。約２年前脳梗塞で倒れ闘病生活が始まった。言葉も喋れず、食べ物も流動食となったが、こちらの言うことは分かっているようであった。病院に行くと機嫌のいい時は、にっこり笑い機嫌の悪い時は、横を向いていた。こちらが気分は良いか、しんどくないかと尋ねると首を横に振ったり、縦に振ったりして答えてくれていた。

もともと入院するまでは病気をしたことの無いスパーウーマンのような人であった。そのこともあり心の中ではまだまだ大丈夫と思っていたが、あっけなく肺炎でこの世を去った。

最後の方は眠っていることが多かったが、あの詩のように大事にできるチャンスは今日が最後かもしれないと思い、例え聞こえなくても、もっと話をしてやれば良かったといましみじみ思っている。

「悲しみに出会ったおかげで今まで見えなかった世界を見せて頂ける」と書かれた言葉が身に染みる。

（T・Y）